

## 「しょこつがわ連携研究会」の地域活動に参加して

(一財)北海道開発協会では、平成30年度から地域活性化活動助成を踏まえ、地域で活動する助成団体の活動をレポートしていきます。

今回レポートする助成団体は、「しょこつがわ連携研究会（代表：竹内正美氏、以下、「連携研究会」という）」です。助成対象活動は、「渚滑川における上下流の交流及び新たな資源を活用した魅力と付加価値創出による観光産業構築の取組み」です。連携研究会は、平成28年4月に設立され、これまで観光資源調査として、「夏・冬の林道調査」や「観光のための食の開発」等の活動を行っています。

連携研究会の平成30年度の活動計画は、①渚滑川を活用した観光ブランディング開発、②観光メニュー構築、③観光交流事業、④事業推進のための観光箇所の整備と導入、⑤地域との協働事業（住民への告知啓蒙）です。今回は、「観光メニュー構築」活動の一環として、平成30年10月14日（日）に実施された『白幽林道（大規模林道）の紅葉を見る会』（モニターツアー）に同行しました。

見学会の名称とされた“白幽林道”は、道道617号オシラネツプ原野濁川停車場線を山側に進んだ場所で、緑資源幹線林道「滝雄・厚和線」として整備を行った高規格林道（いわゆる大規模林道）の一部区間（2009年に工事中止）です。滝上町濁川の国道273号から白幽林道のオシラネツプトネルの出口までは、およそ33km。その約12km区間が白幽林道の大規模林道として、路盤、道路幅員、法面処理などが高規格で整備されています。縦断勾配もゆるくアクセスしやすいうえ

に景観が優れていることが特徴で、それを地域資源として活用できないか、というのが研究会のねらいです。

参加者は、連携研究会メンバーの他、新聞広告を見て参加した紋別市や滝上町の住民をはじめ、紋別市・札幌市の観光事業関係者等25名が参加。滝上町道の駅「香りの里たきのうえ」に集合の後、「白幽林道⇒古民家（ハッカ蒸留窯）見学⇒深場（松浦武四郎が到達した川縁）」が見学会コースとなっていました。

見学会では、通常、通行止めとなっている白幽林道へのアクセスを特別に開放いただいたことで、普段見ることが出来ない滝や溪谷の様子、また見ごろとなった紅葉を特別な場所から見るができます。そして平成30年は北海道命名150年を迎え、その名付け親として知られる探検家「松浦武四郎」ゆかりの地を見学するなど、参加者の期待を感じられる内容となっています。渚滑川と松浦武四郎の関係は、6度にわたる蝦夷地の探査を通じ、武四郎が書き残した「東西蝦夷山川地理取調日誌」の一部にある「志与古津日誌」に見ることができ、また山川の名称が記載された地理取調図には渚滑川を「シヨコツ」、オシラネツプ川を「ヲシラン子フ」と表記されています。

見学会当日は、快晴に恵まれ白幽林道から望む紅葉も、まさに今が見ごろとなり参加者もとても感動の様子でした。白幽林道の終点となるオシラネツプトネルの出口では、その眼下に紅葉と滝が一緒に望めるような場所や、ハッカ蒸留窯が残る古民家へ向かう途中には、参加者の思い出の場所があり、「三尺画廊」と呼ばれる珍しい溪谷にも立ち寄りました。また、現在、



道の駅にて事前説明



白幽林道から望む紅葉



ハッカ生産量で全国95%を占める滝上町において、古民家の家屋に昭和初期に当時使用されたハッカ蒸留窯が今も大切に保存され、所有者の方からも当日のお話を聞くことができました。



眼下に見える名無しの滝

旧林道の橋上から望む「三尺画廊」と呼ばれる溪谷



古民家でハッカ蒸留窯を見学する参加者

最後は、松浦武四郎ゆかりの場所としてオシラネツプ川の川縁へと向かいました。「志与古津日誌」には、当時、武四郎がオシラネツプ川で見た情景を『川の二股に出たり。然る処此辺鹿多きよしにて其足跡川の辺に此方彼方え附て、爰え来たりしや至極足場よろしかる也。其川中は七八間にて左りの方え入る中川也。是此シヨコツ第二の支流のよし。其名義は川口に大岩峨々と聳え有ると云儀のよし也』\*1と書き記されています。訪れた場所は、河岸の樹々が紅葉し、川の流れの中には滝口が何段も見られる場所で、また魚が集まりやすい場所でもあり、アイヌの人々にとっても大切なサケの捕獲がなされたのではないかと想像しました。そんな思いを描きながら参加者はシャッターを



オシラネツプ川の川縁

切っていた様に見えました。

見学後の意見交換では、「すべての自然がきれいだと感じた」、「深場はシンプルで落ち着く場所」、「ツアー化にはいろんな部分でのエネルギーが必要」、「自分が暮らす近くで、こんなに良い場所があることを初めて知ることができた」など景観に対する評価や今後の展開可能性について、さまざまな感想や意見が出されました。

終了後、参加者の勧めで、渚滑川沿いに整備された溪谷遊歩道を散策しました。遊歩道から誰でもたやすく身近に溪谷や様々な滝を眺めて楽しむことができ、また、バリアフリー区間を設けるなど配慮もされています。遊歩道では、赤ちゃんを連れた家族、お年寄り、ガイドを伴う観光客など、様々な人とすれ違いました。皆すれ違う際に「こんにちは」と声を掛け合う姿が、とても印象に残っています。

今回の『白幽林道（大規模林道）の紅葉を見る会』とした見学コースも、従来の観光コースと併せることで、新たな観光メニュー構築へと広がる可能性をこの見学会を通じて感じました。大変有意義な地域活動として、今後の展開を期待したいと思います。



溪谷遊歩道入口とキャッチ&リリースの告知板

\* 1 松浦武四郎・著 秋葉実・解説「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中」北海道出版企画センター p.303 より引用